

シュッツの社会科学基礎論における生の諸相 ——体験次元と意味次元の統一としての主観的意味——

高州 賢

要 約

本稿の目的は、A.シュッツにおける学問と生の区別と連関の論理を明らかにすることである。シュッツによる理解社会学の基礎づけの議論は日常知と科学知の関係づけを模索するものとして捉えられてきたが、常識と科学の二分法の下では、シュッツの論じる生の論理的重層性が見えにくくなるという問題がある。そこで本稿は、ウィーン時代に書かれた著作および草稿を扱い、シュッツが生における体験次元と意味次元という区別を導入していることに注目する。ベルクソンに依拠したこの概念化は、人間の思惟の基盤を分析するという点で、科学知への批判的視点と日常知に埋没することへの警戒を同時に含意している。シュッツは著者『社会的世界の意味構築』において、両次元の区別に基づいて社会的世界の機制を解明している。意味次元についてシュッツは、他者理解が所与の知識に基づく意味付与として遂行されるという「自己解釈」の機制を明らかにし、他方で体験次元については、他者の体験の連続的生成を見遣るという「持続の同時性」を論じている。体験次元と意味次元は日常的行為者においては主観的意味という形で統一を形成しているが、「主観的意味連関の客観的意味連関」としての社会科学は必然的に体験次元を欠く。理解社会学の認識限界を踏まえたシュッツは、生きられる日常における体験と意味の統一に、純粹に哲学的な思惟や社会科学的分析によっては得られない社会学的反省の基盤を見いだしている。

キーワード：シュッツ、学問と生の連関、体験の流れ

1. 問題の所在

社会学にとって、学問と生の連関は重要な課題のひとつである。経験科学としての社会学は、実際に生きている人間を科学的概念の下で分節化して記述することを業としているがゆえに、いかなる方法に基づいた研究でも常に「カテゴリー化の暴力」と隣り合わせである⁽¹⁾。この問題を佐藤嘉一はA.シュッツにならって「社会学のニヒリズム」と呼んでいる。このニヒリズムは、社会学が抽象的な認識を具体的な生と取り違え、人間の生が無化されるときに出現するのである（佐藤 1997: 40）。また、実証主義の隆盛に対する警戒としてTh.ルックマンも同様の見解を有している。ルックマンは、人間を数量化し形式化することで人間活動がつねに物象化の危険にさらされると指摘し、「社会科学の危機」への警鐘を鳴らしている（Luckmann 1983: 18=1989: 42）。社会学が自らの機能を自覚しつつ研究を遂行するには、学問としてのその営みが生きられる人間とどのような関係にあるのかを、絶えず反省する必要がある。

学問と生の問題に関して、社会学者はシュッツの科学論を範としてきた。シュッツの考えでは、社会学者は論理的認識という自らの目的に従うがゆえに、そこで記述される人間は、どのように行為するかをあらかじめ決定されており自由を欠いた「人間型 (puppet)」である（Schutz 1962: 41）。しかし、科学的構築物としての人間型は同時に実在する行為

者と一貫性 (consistency) を持たなければならない。そのためにみとすべき準則として、シュッツは、科学的モデルによって指示された行為が行為者自身やその相手にとって理解可能であるようにモデル構築をすべきだとする「適合性の公準」などを挙げている (Schütz 1962: 44)。こうしたシュッツの学問論は、一次的構成概念と二次的構成概念の関係づけを試みる先駆的業績として位置づけられてきた。高度に論理的でないとなみとしての学問には、それに先立って前学問的な生が与えられているのであり、シュッツはこの生の領域の解明を通じて社会科学の批判的再構築を試みた思想家なのである。

先行研究はこの「科学／前科学的領域」という区別に立脚し、シュッツにおける主観的意味概念の特徴、および主観的意味の把握 (不) 可能性について論じてきた。浜日出夫は「シュッツ＝パーソンズ論争」における両者の科学観の相違に着目し、シュッツが「主観的観点」という表現の下に想定しているものを、パーソンズにおいて欠落している「日常生活の論理」として指摘している (浜 1989)。また山口節郎はシュッツの提示する科学的概念構成の公準を批判的に検討し、日常生活者の信念と科学的構成物との一致を目指す「適合性の公準」が、科学性の基準たる「論理一貫性の公準」と両立不可能であると主張している (山口 1981)。他方で那須壽の研究では、「シュッツは……『行為者の心のなかで生じていることがら』という意味での『主観性』は、行為者と同一の観察者すなわち行為者本人でないかぎり、科学的観察者によっても日常的観察者によっても捉えられないとする立場にたっていた」(那須 1997: 129) という見解を提示している。那須は、シュッツが主観的意味の把握不可能性⁽²⁾ に立脚していること、そしてこの点にシュッツが常識的解釈と科学的解釈の区別にこだわる理由が存すること、を明らかにしている⁽³⁾。

しかし、常識と科学の二分法を強調することで、シュッツが両者を同一の論理の下で記述しようとしていたことが見えにくくなる可能性がある。先行研究でも指摘されていることであるが (山口 1981: 36-7; 那須 1997)、学問する生と前学問的な生は、生という共通の基盤の上に成り立つものである。シュッツが試みたのは、生の基礎構造を掘り下げることによって学問と (狭義の) 生が分化する地点を発見することであった。またこの二分法は同時に、主観的意味とその理解の成立機制に関するシュッツの論理の重層性を不明確にする可能性もある。とりわけ、後に明らかになるように、生における体験次元への注目は日常知と科学知の双方への批判的視座を含んでいる。本稿が試みるのは、シュッツの記述が採用する「人びとに内属する視点」(河野 2012: 572) を解剖し、そこでの生と学問の区別と関係づけの論理を明確化することである。

そこで本稿は、シュッツの立論、とりわけ主観的意味という概念化に含まれる「体験」と「意味」という二つの次元を考察する。この論理的重層性は『著作集』に収録された渡米後の英語の諸論稿においては明瞭ではないため、本稿は『社会的世界の意味構築』(Schütz 1932=2006、以下『意味構築』と呼ぶ⁽⁴⁾) を中心としてウィーン時代の著作・草稿を検討する。まず初めに、シュッツが「体験」という概念によって意味構成に先立つ領域を論じていたことを、シュッツ自身の意図に触れつつ明らかにする (2章)。次に社会的世界における意味次元 (3章) と体験次元 (4章) について検討する。その上で、両次元が統一を形成する地点に「主観的意味」という概念を見だし、「主観的意味連関の客観的意味連関」として定義される社会科学の特質を明らかにする (5章)。最後に、社会的反省における生きられる世界の意義を明らかにする (6章)。

2. 意味構成に先立つ次元としての体験

シュッツは理解社会学の哲学的基礎づけに取り組んでいる主著『意味構築』において、「『意味』と『理解』の現象の最終的な起源は、この最深部の、反省によって接近でき、厳密に哲学的な自己省察においてのみ解き明かされる体験層の中で初めて示されるのである」(Schütz 1932: 10=2006: 35)と述べ、体験 (Erlebnis) は意味と理解の根源にあると明確に述べている。体験という概念は、19世紀の哲学と心理学に導入され、M. ヴェーバーが「ロッシャーとクニース」において吟味したものである⁽⁵⁾。シュッツが体験について述べる時、彼はこれを常に「体験の流れ」として概念化している。つまり体験はなんらかの固定した存在ではなく、絶えず変化する流動性の中にある。したがって体験の流れは「生成しつつ生成し去るもの」(Werden und Entwerden)として規定される (Schütz 1932: 43=2006: 77)。

ところで、「生成しつつ生成し去るもの」として直接指示されているのは、H. ベルクソンの持続 (durée) という概念である。ベルクソンにおいて「持続」は、物体の静止状態を指す通常の語法とは正反対の事態を指しており、不断に流れ続ける時間の相を意味する。この時間は時計によって計測された量的時間ではなく、質的で連続的な流れとしての時間であり、ちょうどこの対比は、繰り返し鳴る鐘の音を個別の音に分解して聴くか、連続的なひとまとまりのメロディーとして聴くかの違いに対応する (Bergson 1889=2010: 85-6)。この「持続」をシュッツは内的な時間体験として解釈し、「体験の流れ」と互換的に使用する。

これらの議論から、シュッツは持続ないし体験の流れを流動性と連続性によって特徴づけている、と言える。この点から、体験が意味に先立つ次元を指していると明らかになる。意味を構成するというのは、ある対象を「何かとして」把握することに他ならない⁽⁶⁾が、体験それ自体はつねに生成変化しており、明確な輪郭を持った「何か」ではないためである。逆に言えば、生成し去った体験については、何らかの意味において把握する可能性がある。この事態を指してシュッツは、「体験されたこと (das Erlebte) だけが有意味的なものであり、体験していること (das Erleben) はそうとは言えない」(Schütz 1932: 49=2006: 85)と述べている。シュッツの考えでは、生成している体験そのものは意味構成以前の次元にあり、生成し去った体験に反省という作用が向けられることで意味が構成されるのである。

『意味構築』におけるシュッツは、ほとんど例示を行うことなく、一貫して抽象的な水準で議論を進めている。シュッツの体験概念を具体的に知るためには、『意味構築』よりも以前に書かれた草稿が有用である。1924年から27年頃に書かれたとされるこの草稿においてシュッツは、次のような例を挙示している。

夢から目覚めた人は初めは体験のぼんやりした印象にとどまるのであり、多少の自己省察において反省する人にはようやく、その夢の体験が引き起こした(もっと慎重に言えば、その体験が伴った)状況が明らかになるのである。これと同様、むろん体験する持続にとってのみ、見たもの全て、感じたもの全て、楽しんだもの全てが、夏の夜の体験に等しく不可分に結びついている。山や海、太陽や木、鐘の音や会話、ボートの動きや森の色彩についての想起は、回顧する意識にとってはじめて、明確に境界づけられた諸々のイメージ (scharf begrenzte Bilder) へと区別される。(Schütz 2006: 49-50)

体験者は山や海等々を、まさにそれを体験する流れの中においては、全体的な印象として体験しているものであり、「山」や「海」として同定する形で把握しているわけではない。逆に、「明確に境界づけられる」ことによって、あるいは「人工的にすなわち概念的に区別」(Schütz 2006: 50)されることによって、そうした体験印象は「何かとして」、つまり何らかの意味において捉えられることになる。この例を草稿の冒頭で提示したシュッツは、その本論において体験の流れから意味が分出する過程を論じている⁽⁷⁾。

ここまでの検討から、体験次元と意味次元との論理的区別をシュッツが導入していることが明らかになった。ところでシュッツにおけるこの区別は、概念的科学的基礎を問うだけでなく、同時に日常知への埋没に対する警戒をも含意している。この点は、同時代の思想、とりわけ「生の哲学」との連関を検討することで明確化される。

シュッツの思想史的な立ち位置としては、新カント派と論理実証主義に向けられた批判的態度が知られている。新カント派は自然科学および文化科学的基礎づけを、論理実証主義は言語分析を中心とした論理学の刷新を試みているが、両者の共通点は科学的認識の論理学的分析にある。これらの学派は対象を科学的に構成する (konstruieren) 際の正しい認識方法を問うというアプローチを採用しているが、シュッツは認識主体たる哲学者や科学者を特権的な位置に置くスタンスへの批判から、前学問的領域 (vorwissenschaftliche Sphäre) を主題化している (Srubar 1988: 47-8)。

しかし、シュッツは前学問的領域の重要性を認識しつつも、直ちに日常知の分析に焦点化するわけではない。シュッツは学問の論理性の基盤を問うことから出発し、人間の思惟活動全般——常識的な思惟であれ、科学的な思惟であれ——の批判的な吟味へと進んでいる。このような問題意識は、「生の哲学」による知の地殻変動の一環として解釈可能である。生の哲学は19世紀後半から20世紀初頭にかけて隆盛を迎えた哲学的思潮であり、「合理性や理性、概念や理念に本質的に対立するもの、すなわち非合理的なものとしての生をあらゆるものの基礎とし、あらゆるものの基準とする哲学的立場」(Schnädelbach 1983=2009: 199) を指す。この立場の下では、学問・科学のみならず概念的なものの一般が、流動的な生と緊張関係を有すると想定されるのである⁽⁸⁾。

生の哲学の基本的想定とシュッツの論理の内在的な連関は、言語ないし概念の機能に関するベルクソンとシュッツの議論から明らかになる。ベルクソンは『時間と自由』において、持続へと沈潜することの難しさの理由を、「物事を区別するという飽くなき欲望に苛まれながら、現実を記号に置き換えてしまう、あるいは記号を通してしか現実を見ない」(Bergson 1889=2010: 125) という点に見いだしている。つまり、質的な連続体である内的持続の体験は、言語による記号化の作用によって体験それ自体とは別のものに変換されてしまうのである。さらにベルクソンはこの置き換えが「一般的な社会生活の要請によく適合する」ことに起因していると主張する (Bergson 1889=2010: 125)。私たちは社会生活を円滑に進めるため、社会的に通用する記号としての言語を内的体験よりも優先させているということである。シュッツが先述の草稿において「私たちは……獲得された思考の習慣によって、私たちの持続体験を時間と空間の体験によって置き換えることを強いられている」(Schütz 2006: 51) と論じるとき、念頭に置かれているのはベルクソンの議論である。さらにシュッツは、草稿の中で次のような一節を書き残している。

私たちが内的持続の体験とともに身を置いている空間世界と時間世界は、記憶とあなた体験によって、つまり社会的に規定された世界であり、私たちの「概念」(わたしたちの経験 (Erfahrung) の原材料という意味での) は言語記号 (Sprachsymbol) という社会的に規定された基盤の上に構築されているのである。(Schütz 2006: 52)

ここでシュッツは先に引用した『時間と自由』の記述に直接言及しているわけではないものの、この記述の後にバルクソンの名前を挙示しており、両者の論理構造の内在的連関は明白である。バルクソンの主張を補助線としつつこの記述を解釈すると、私たちが言語・記号(象徴)・概念を基盤として経験する日常的な意味世界(社会生活の世界)にとどまっていたのは持続と体験の次元が見落とされてしまう、という含意を汲み取ることができる。こうしてシュッツは知と意味のより根源的な解明のため、「学問的／前学問的」という区別だけでなく「体験／意味」という区別をも必要としたのである。

次章以降ではふたたび『意味構築』の検討に戻り、体験次元と意味次元が他者との関わり方の二つの次元をなしていることを明らかにする。しかし、同書でのシュッツの記述は実際には両次元が混在する形で進められており、本稿の作業は分析的なものである。この作業を通じて、最終的に「主観的意味」という領域が持つ二重性が明らかになる。

3. 自己解釈による意味構成と他者理解

シュッツは他者理解を論じるにあたって、これを「一般に『他者理解』 („Fremdverstehen”) の言葉で表されるところの、社会的世界における特有の意味付与」(Schütz 1932: 106=2006: 155) として規定している。ここで重要なのは、他者理解が第一義的には意味次元での作用として捉えられている点である。つまり、理解とは他者を「何かとして」把握することに他ならないのである。これについては、「他者理解は自己解釈に基づけられている」(Schütz 1932: 123=2006: 176) というテーゼを検討することで明瞭になる。

自己解釈 (Selbstausslegung) は、シュッツが『意味構築』第1章後半で導入している概念である。自己解釈とは、「先所与 (vorgegeben) の経験の全体連関に体験を組み入れること (Einordnung)」(Schütz 1932: 83=2006: 127) であるとされる。ある現在の体験に対しては、時間的に先行し既に生成し去った体験の蓄積がつねに存在する。これは、現在の体験にとっては「あらかじめ与えられた経験連関」として位置づけられる。そして体験はこの経験連関にはめ込み整序する (ein-ordnen) ことで規定され、有意味なものとして構成される。前章で意味は反省的に構成されると述べたが、シュッツは生成し去った体験を基盤として成り立つ自己解釈作用を論じることで、意味構成のより精確なメカニズムを解明している。

補足すれば、ここで抽象的に「経験連関」と呼ばれているものは、日常世界においては知識や解釈図式にあたる。私たちが経験の対象を、いつでも反復可能な形で、特定の理念的対象として把握できるのは(例えば机を机として判断できるのは)、それが知識という形であらかじめ与えられているからである (Schütz 1932: 82=2006: 126)。自己解釈作用とは、「未知のものを既知のものに還元すること」(Schütz 1932: 90=2006: 135) に他ならない。

以上を踏まえると、「他者理解は自己解釈に基づけられている」というシュッツの主張は、「あらゆる他者理解が自己の経験の蓄積からなる知識を前提にする」という意味であ

ると判明する。これについてシュッツは、ドイツ語を話している相手の理解を例として説明している (Schütz 1932: 121-3=2006: 174-6)。話者の行為に対して理解する側は、①話者の身体の動作の把握、②音声の把握、③音節化された言葉の把握、④言葉の語義の把握、⑤話者の意識経過の把握、という4つの作用を遂行している。このうち①から④の要素については、理解する側がドイツ語の知識やそれまでの経験を基に把握するものであり、自己解釈作用によるものである。⑤のように他者の意識経過にまなざしが向けられる場合、参照される知識は「特定のあなたについての先行知識」(Schütz 1932: 151=2006: 210)であるという点で特異であり、シュッツはこれを単なる自己解釈とは区別して論じている。しかし、他者理解に知識が必須であること、知識によって構成される意味の次元は自己解釈の機制によって成り立つことには変わりがない。この意味において、他者理解は自己解釈を前提とするのである。

4. 持続の同時性という体験

前章では、他者理解に注目することで、社会的世界の意味次元を扱った。しかし、シュッツの理論では社会的世界にも体験次元が存在する。生一般において導入される体験と意味の区別は、他者と関わる世界においても保持されるのである。

社会的世界における体験次元は、「持続の同時性」の議論において示されている。西原和久は廣松渉による解釈に依拠しつつシュッツの論理構成の二元性を「自己解釈の理路と同時体験の理路」として整理しているが (西原 2003: 96, 129)、本稿の試みはこの解釈を意味次元／体験次元という観点から発展させるものとして位置づけられる。

体験の流れという概念を導入した時と同様、社会的世界の体験を論じる際に参照されるのもベルクソンである。シュッツはベルクソンの著作をフランス語で引用しつつ、持続の同時性 (Gleichzeitigkeit) を「私の意識にとって1つであっても2つであっても違いのない2つの流れ (deux flux qui sont pour ma conscience un ou deux indifféremment)」(Schütz 1932: 163=2006: 163) として定義する⁹⁾。「流れ」という表現から読みとれるように、この同時性は連続的かつ流動的に生成する体験において成立する関係であり、物理的な計測時間の同時性とは無関係である。それゆえ、シュッツは同時性を言い換えて「私にとってあなたの持続は絶対的現実として与えられており、同様にあなたにとって私の持続は絶対的現実 (absolute Realität) として与えられている」ことであると述べる (Schütz 1932: 113=2006: 164)。

同時性はあくまでも体験者の意識の次元で成立する現象であるから、それは同じ空間に居れば生じるという性質のものではない。逆に、空間を共にしていなくとも生じる「擬似同時性」(Schütz 1932: 114=2006: 165) が想定可能である。このように考えるシュッツが同時性の生じる基準として提示しているのは、「見遣る」という作用である。シュッツによると、「他者の体験についてはその経過を見遣る (hinsehen) ことができる。これは、あなたと私とはある特殊な意味で『同時的』であること、両者は『共存する』こと、私の持続とあなたの持続とは『交差する』ことにほかならない」(Schütz 1932: 112=2006: 162) のである。他者の体験を見遣るという作用は、「まなざしを向ける (hinblicken)」とも言い換えられているが (Schütz 1932: 113=2006: 164)、これが持続の同時性の根本をなしている。

同時性を生成として定式化したのが、「共に時を経ること (Zusammenaltern)」(Schütz

1932: 113, 183=2006: 164, 247) という表現である。時を経る (altern) というのは、ベルクソンの「老いる (vieillir)」という言葉に由来する (石原 2009: 12; 梅村 2016: 167)。シュッツにおいてこの言葉は、新たな体験が記憶に付加されつつ連続的に変化する体験を表す⁽¹⁰⁾。すなわち、「私たちが新しい体験内容をすでに記憶に保存された体験に付け加えることによって、私たちの持続は疑問の余地なく連続的に経過する、つまり私たちは時を経るのである」(Schütz 2006: 67)。したがって共に時を経るというのは、時間の連続的な推移の中で新しい体験の生成を互いに目撃し合う関係なのである。

生における体験次元と意味次元という層化は、まさに生成する時間の複雑性に由来している。体験の流れは、一方では過去-現在-未来が連続的に推移する中で生じる「今このように」という生成の相にあり、この相において持続の同時性、「共に時を経る」という関係が成立する。他方で生成し去った体験は、沈殿して所与の知識を形成し、これを基盤として理解の意味次元が成立する。しかし、この体験次元と意味次元が統一を形成する地点が存在する。それがシュッツの言う「主観的意味」である。次章ではこの主観的意味概念を扱い、主観的意味の理解をめぐる理解社会学の方法が持つ認識限界を明らかにする。

5. 体験と意味の統一としての「主観的意味」および理解社会学の問題

2章で述べたように、体験次元と意味次元の区別は、知と意味の根源を問うシュッツが論理的に導入したものである。前章まではこの区別に沿ってシュッツの論理を再構成してきた。しかし、生きられる日常世界の行為者にとって両次元の区別はなんら問題とされず、両次元は統一を形成している。ベルクソンにおいて強調されていた「体験される現実の記号への置き換え」の問題は、シュッツにおいては行為者の生における統一として捉え返される。このような観点から、以下ではシュッツの「主観的意味」概念を検討する。

『意味構築』の冒頭でシュッツは主観的意味を言い換えて「生き生きとした意識における構成化の過程」(Schütz 1932: 35=2006: 66) と述べている。この過程を表しているのが、「複定立的構築」という表現である。これは、体験の流れの中で有意味的体験が一步一步構築されてくることを指している。例えばグラスに水を注ぐという行為は、ボトルを開け、ボトルを傾けて水を少しずつ注ぎ、一杯になったところでボトルを垂直に戻して注ぐのを止める、という一連の過程によって遂行される。この過程において行為者は、水を注ぐという一連の有意味的体験を順次構築しているのである。他方、この一連の体験経過を「水を注ぐ行為」というひとまとまりのものとして捉える際の作用をシュッツは「単定立的」(monothetisch) と呼び、複定立的 (polythetisch) な作用と区別している (Schütz 1932: 71-2=2006: 112-3)。

単定立と複定立は、行為の主観的意味を進行中の過程の観点から表現したものか、すでに終わったものとして表現したものか、の違いに対応する。それゆえ、行為論的には両者は行為の経過相と完了相に対応するのであり、その意味で表裏一体である。シュッツは経過相における行為を「遂行的行為」(Handeln)、完了相における行為を「達成的行為」(Handlung) と呼んでいる。遂行的行為を条件づける行為の完了相は、具体的には「企図」(Entwurf: 投企) である (Schütz 1932: 58=2006: 96)。先述の例では、水を注ぐこと、あるいは水を飲むことが企図である。一連の動作と状態が「水を注ぐこと」として把握され、

これに基づいて行為が遂行されているのである。

このように見てくると、主観的意味とは体験の流れの中で一歩ずつ生成し構築されてくるものであるとわかる⁽¹¹⁾。主観的意味という「構成化の過程」は、生成する持続の流れそのものではないが、生成し去り元の体験とはもはや関わりを持たなくなった意味の層——その典型例が「 $2 \times 2 = 4$ 」という客観的意味である——を指すものでもない。経過相と完了相が有機的に結びついて初めて行為の主観的意味は成り立つのである。この点で主観的意味とは「体験と意味の統一」なのである。

主観的意味の概念に含まれる体験と意味の二重性から、シュッツが自然的態度の社会的世界における「主観的意味の理解」としてどのような事象を想定していたかを明らかにすることができる。シュッツはある行為の結果として生じたものを産出物 (Erzeugnis) と呼びつつ、次のように述べる。

私たちがある産出物の主観的意味という言い方をするのは、産出者の体験の証拠となる産出物に対してその体験が有するか有した意味連関をまなざしに入れる場合である。つまり、その産出物の措定者のこうした体験が構築された複定立的作用を、私たちの持続の同時性ないし擬似同時性において追遂行することができる場合である。(Schütz 1932: 150=2006: 208)

シュッツの「主観的意味の理解」は、ある人物の行為に対してその人物の企図とされる説明を結びつけることではない。むしろ、その行為者がその企図の下でひとまとまりのものとして位置づけている意味連関を、一步一步生成する流れの中で捉えることに他ならない。これを可能にするのが、先に社会的世界の体験次元として論じた持続の同時性である。しかし、同時性において相手の体験の流れを見遣るだけでは、他者理解は成り立たない。意味次元的作用としての他者理解は知識に基づいて相手を把握することであり、まなざしを向けるだけでは「あなたがその複定立的体験を組み入れるところの意味連関の性質についても、その体験自体の相在についても、何も述べられていない」(Schütz 1932: 151=2006: 209-10) のである。

生成の流れにおいて成り立つ主観的意味の理解は、一時点的に成立するものではなく、先行知識の下での理解を絶えず確認し場合によっては修正するという実践である。シュッツはこの点を説明して、「あなたについての私の経験の蓄積は、われわれのあらゆる瞬間において豊かになるのであり、絶えざる修正によって変化もする」(Schütz 1932: 188=2006: 254) と述べている。

以上が主観的意味の理解の原理である。これに対し、社会科学の方法としての理解社会学には、生きられる現実における理解とは決定的に異なる点がある。概念と思考によって主観的意味を把握する社会科学は、もはや行為者における体験と意味の統一を保持できないのである。

シュッツの考えでは、社会科学の目標は、社会的世界を生きる人間を最大限の明晰さにおいて説明することである (Schütz 1932: 253-4=2006: 332-3)。したがって、科学者として振る舞う限り、社会学者は行為者の体験の経過を「見遣る」ことはなく、持続の同時性において「共に時を経る」こともない。社会学者が行為者に向ける理解の作用は、体験

次元における変容を被っているのである。

この変容は、対面状況にない同時代世界（Mitwelt）の他者に対して観察者が向ける態度が被るのと同様の変容として考えることができる（Schütz 1932: 253=2006: 332）。シュッツは同時代世界における他者の例として、「友人A」のように現在居合わせていない存在、「郵便局員」のように機能の類型において捉えられる存在、「国民」「民族」といった高度に匿名的な社会的集合体などを挙げている（Schütz 1932: 202, 223-7=2006: 270, 296-9）。重要なのは、シュッツがこれらを「同時代世界の匿名性が大きくなっていくことの例であり、相対的な体験の近さ（Erlebnisnähe）から絶対的な体験の疎遠さ（Erlebnisfremdheit）への移行が一步步遂行されることの例」（Schütz 1932: 202=2006: 270）として扱っている点である。この「体験の疎遠さ」こそが、社会科学における体験次元の変容を特徴づけるものである。

こうした考察を踏まえてシュッツは、「科学（Wissenschaft）は常に客観的意味連関であり、社会的世界のすべての科学の主題は、主観的意味連関一般ないしは特定の主観的意味連関についての客観的意味連関を構成することにある」（Schütz 1932: 255=2006: 335）と述べる。社会科学における理解は行為者の体験の流れに関わることができない以上、それは客観的意味連関として、つまり自己解釈による他者理解の一種として構成されることになる。行為者が内的持続の流れの中で一步一步構成し構築している有意味の体験について、科学者はそこから体験の流れを取り去り、所与の知識や枠組みにあてはめるのである⁽¹²⁾。ここに理解社会学の道具としての理念型の本質も存在する。社会科学にとって行為者は人格の理念型（personale Idealtypen）として与えられるのみであり、この行為者は個別の生き生きした持続体験を欠いたモデルである（Schütz 1932: 275-6=2006: 358-9）。理解社会学の「理解」とは、行為の主観的意味における体験と意味の統一をほどこき、他者を所与の枠組みの下で把握することなのである。

6. 生きられる日常と「中間領域の学」

本稿は、シュッツの記述する生を生成する体験の流れの次元と体験を「何かとして」固定化する意味の次元に分け、主観的意味という概念がこのふたつの次元の統一において形成されている⁽¹³⁾ こと、理解社会学の標榜する「主観的意味の理解」はつねに体験次元を欠くこと、を明らかにした。シュッツの「主観的意味の把握不可能性」という想定は先行研究でも指摘されていたが、シュッツ自身はこれを二側面において考えている。第一に、他者の体験それ自体への接近は不可能であるが、持続の同時性において主観的意味が一步步生成するさまを見遣うことは可能である。第二に、持続の同時性を欠いた科学者と行為者の関係においては、主観的意味の生成に接近することもできず、ただそれを客観的意味連関において記述することができるのみである。

学問と生の関係についてのシュッツの立場は、構成されたカテゴリーによる記述に徹しなければならないという社会学的認識の限界を別括している点で、「反社会学的」であるとさえ言える。実際にシュッツは、友人の哲学者A.グールヴィッチとの往復書簡の中で、グールヴィッチの展開する社会学批判と問題意識を共有しつつ、次のように述べている。

今やいかなる思考の歩みからあなたが「形式社会学」と呼ばれるものに批判を向けられるのか、私にはよく分かります。……社会学は世界の謎を説明したり、人間の定義を扱ったり、認識論的諸範疇を社会的存在に還元したりする要請を掲げるや否や、すでにそれはニヒリズムの悪魔の虜となっています。(Grathoff ed. 1985=1996: 161)

社会学が用いる形式概念（例えば「階級」「集団」「適応」といったものが想定される）が人間の生を汲みつくすことはできない、というのがシュッツの発言の趣旨である⁽¹⁴⁾。ゲールヴィッチの「形式社会学」に対する危惧は、科学の形式概念が人間に対して無制限に適用されると、技術的に操作されるような反作用で動く「人間動物」という人間像が生まれる、という点にある（Grathoff ed. 1985=1996: 157）。上記のシュッツの発言は、こうしたゲールヴィッチの問題提起を踏まえたものである。

しかし、シュッツの「反社会学的」精神は、社会学の放棄を含意するわけではない。シュッツの社会学批判はベルクソン哲学における持続体験と記号との対立の上に構築されているが、これは結論ではなく出発点なのである。シュッツ理論の成果は、生きられる世界の主観的意味構成における体験と意味の統一を明らかにしている点にある。だがこの統一性の存在は、哲学的に論証されるものではなく、日常を生きる人間にとっての現実である。それゆえにシュッツは「社会学的範疇だけでも哲学的範疇だけでも十分に解明されえない中間領域」としての日常⁽¹⁵⁾に注目し、ここに社会学の存立基盤を見いだすのである（Grathoff ed. 1985=1996: 161）。

日常が社会学の基盤になりうるというシュッツの論理を、本稿の論旨に沿って再構成するならば、次のようになる。日常における人間は、絶えず変化する体験の流れの中に身を置いているがゆえに、社会学の形式概念に還元することはできない。しかし、日常世界は流れの中にありつつも常に秩序立った意味世界として現出する。生きられる世界は、意味を接続点として学問と結びついているのである。それゆえ、日常世界には「社会学者が自らの用語で特徴づけ、記述し、その意味合いを尋ねることができるような出来事」（Grathoff ed. 1985=1996: 161）が存在する。

生きられる日常の主題化は、日常知と科学知の双方に批判的たらんとする視座とも矛盾しない。体験次元や意味次元といった生の諸相を論理的に分節化することで、シュッツは生における日常と科学の位置と特質を解明している。「理解社会学の哲学的基礎づけ」を試みるシュッツは、純粋に哲学的な思惟から生きられる日常へと進むことで、社会学的反省の基盤として「体験と意味の統一としての主観的意味」を手にしたのである。

【注】

- (1) 岸政彦は、聞き取り調査においても当事者の語りを調査者が再記述せねばならない以上はカテゴリー化の暴力からは原理的に逃れられない、と指摘している（岸 2015: 206-7）。
- (2) 主観的意味の把握不可能性については、那須（1978）も参照。また盛山和夫はシュッツに間主観性問題への解を期待する廣松渉の解釈を批判しつつ、シュッツの議論の要点を理念型構成に伴う理解社会学の認識限界の確定に見いだしている（盛山 2013: 133）。
- (3) 那須は、シュッツの著作から科学に対する日常生活世界の包括性と対照性というモチーフを析出しつつ、この二重性によって日常知と科学知の相互告発の可能性が担保されていると論じている（那須 1997: 69-77）。

- (4) 一般的に、意味構築 (der sinnhafte Aufbau) の正しい英訳は the meaningful structure であると考えられているが (Eberle 2014: 186)、シュッツの aufbauen (築き上げる) という表現は時間の流れを含意している。またこれは、諸体験の整序を意味する「構成」(Konstitution) とも区別されねばならない。
- (5) 「体験」に関するデイルタイ、ミュンスターベルク、フッサール、ヴェーバーの思想史的連関については、向井 (1997) を参照。
- (6) 現象学の用語を用いて述べるならば、意味は志向性の働きである (Schütz 1932: 33=2006: 63)。そして志向性とは、意識が「与件に向かってそれを何かとして或る意味において捉える (= 統握する) 働き」(榊原 2009: 3) のことを指す。
- (7) これについては矢部 (1999) および高艸 (2016: 164-8) を参照。
- (8) 思惟活動に対するシュッツの批判的精神は、生と思考の緊張関係から人間世界の構成を解明するためであり、思考の価値を手放すことを意味しない。なお、シュッツはこのような立場から、「理論的な思考よりも生それ自体の方が尊厳に満ちている」とする「ドイツで流行した『生の哲学 (philosophies of life)』」の主張を厳しく批判するが (Schütz 1962: 247)、これはやや誤解を招く記述である。哲学史において「生の哲学」に数え入れられる思想家は実に多様であり、ベルクソンやデイルタイのように形而上学的な問題関心から取り組む者もいれば、非合理主義・神秘主義へと通俗化した思想を説く者もいる。先の記述でシュッツが非難しているのは、後者の意味における生の哲学であると考えられる。
- (9) ベルクソンは生成の流れとしての同時性 (contemporain) の他に瞬間的な知覚の同時性 (simultané) についても言及している (梅村 2016: 173)。しかし『意味構築』でのシュッツは一貫して前者の同時性のみを主題化しており、後者の意味での同時性を退けている。
- (10) ベルクソンにおいて「時を経る・老いる」というのは、時間の経過による変化全般を指し、人間だけでなく物質世界の生成変化も含むものである (Bergson 1889=2010: 126)。これに対しシュッツは生成をあくまでも体験の性質として考える。
- (11) 音楽を主題とした論文でシュッツは、「音楽は概念図式と結びついていない意味連関 (meaningful context) である」(Schütz 1964: 159) と述べている。この際の意味とは、本稿が論じる「主観の意味」に他ならない。音楽作品は音の流れに沿って聴くことでしか体験できないという「本質的に複定立的な構造」を有するのである (Schütz 1964: 172)。
- (12) シュッツは科学知の歴史的な蓄積や変化を考慮していないわけではない。この点は後の論文において、個人の生活史的状況との対比で「科学的状況」として論じられている (Schütz 1962: 37-8)。
- (13) このようなシュッツの議論には、内的現象としての主観の意味という規定を再考する余地、そして「間主観的に共有された意味が主観の意味に先行する」(Habermas 1984=1990) という主張への反論の根拠を見いださう。
- (14) ここでの「ニヒリズム」とは、ゲールヴィッチが「現代のニヒリズム」と題する論文で論じた問題であり、「抽象 (真理・正義) を具体 (欲望と欲求の満足、効用など) で置き換えること」として定義されている (Gurwitsch 1945: 174)。ゲールヴィッチとシュッツは科学の形式概念と生との緊張関係だけをニヒリズムの問題と考えていたわけではない。むしろ、知性の自然主義的還元、「人間動物」の観念、人間の生の形式概念への還元といった問題すべてを、ニヒリズム的傾向の産物として捉えていた。
- (15) 書簡においては M. シェーラーにならい「相対的に自然的な世界観」と呼ばれている。

【文献】

- Bergson, Henri, 1889, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Paris: Félix Alcan. (=2010, 竹内信夫訳『意識に直接与えられているものについての試論』白水社。)
- Eberle, Thomas, 2014, "Phenomenology as a Research Method," Uwe Flick ed., *The Sage Handbook of Qualitative Data Analysis*, Los Angeles: Sage, 184-202.
- Grathoff, Richard ed., 1985, *Alfred Schütz/Aron Gurwitsch: Briefwechsel 1939-1959*, München: Wilhelm Fink Verlag. (=1996, 佐藤嘉一訳『亡命の哲学者たち——アルフレッド・シュッツ／アロン・ゲールヴィッチ往復

書簡 1939-1959』木鐸社。

Gurwitsch, Aron, 1945, "On Contemporary Nihilism," *The Review of Politics*, 7(2): 170-98.

Habermas, Jürgen, 1984, *Vorstudien und Ergänzungen zur Theorie des kommunikativen Handelns*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=1990, 森 元孝・干川剛史訳『意識論から言語論へ——社会学の言語学的基础に関する講義 (1970/1971)』マルジュ社。)

浜日出夫, 1989, 「シュッツ=パーソンズ論争」『社会学ジャーナル』14: 47-57.

石原孝二, 2009, 「他者と時間——シュッツの他者論とフッサール, ベルクソン」『哲学雑誌』124: 1-14.

河野憲一, 2012, 「テーマ別研究動向 (現象学的社会学)——現象学的社会学の展開可能性」『社会学評論』62(4): 571-83.

岸政彦, 2015, 「鉤括弧を外すこと——ポスト構築主義社会学の方法論のために」『現代思想』43(11): 188-207.

Luckmann, Thomas, 1983, *Life-World and Social Realities*, London: Heinemann Educational Books. (=1989, デイヴィッド・リード/星川啓慈/山中弘訳『現象学と宗教社会学』ヨルダン社。)

向井守, 1997, 『マックス・ウェーバーの科学論——ディルタイからウェーバーへの精神的考察』ミネルヴァ書房。

那須壽, 1978, 「他者理解をめぐる——A.シュッツを中心に」『現代社会学』9: 119-42.

———, 1997, 『現象学的社会学への道——開かれた地平を求めて』恒星社厚生閣。

西原和久, 2003, 『自己と社会——現象学の世界論と「発生社会学」』新泉社。

榭原哲也, 2009, 『フッサール現象学の生成——方法の成立と展開』東京大学出版会。

佐藤嘉一, 1997, 「A.シュッツと現象学——『シュッツ=グールヴィッチ往復書簡』にみる」『社会学史研究』19: 37-51.

Schnädelbach, Herbert, 1983, *Philosophie in Deutschland 1831-1933*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=2009, 舟山俊明・朴 順南・内藤 貴・渡邊福太郎訳『ドイツ哲学史 1831-1933』法政大学出版局。)

Schütz, Alfred, 1932, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt: Eine Einleitung in die verstehende Soziologie*, Wien: Verlag von Julius Springer. (=2006, 佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成——理解社会学入門 (改訳版)』木鐸社。)

———, 2006, *Sinn und Zeit: Frühe Wiener Arbeiten und Entwürfe*, Konstanz: UVK Verlagsgesellschaft.

Schutz, Alfred, 1962, *Collected Papers I: The Problem of Social Reality*, The Hague: Martinus Nijhoff.

———, 1964, *Collected Papers II: Studies in Social Theory*, The Hague: Martinus Nijhoff.

盛山和夫, 2013, 『社会学的方法的立場——客観性とはなにか』東京大学出版会。

Subar, Ilja, 1988, *Kosmion: Die Genese der pragmatischen Lebenswelttheorie von Alfred Schütz und ihr anthropologischer Hintergrund*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.

高艸賢, 2016, 「体験と認識のはざままで——初期草稿におけるシュッツの問題関心と意味生成」『ソシオロギス』40: 156-72.

梅村麦生, 2016, 「A. シュッツの同時性論——『共に年をとること』としての同時性について」『社会学評論』67(2): 166-81.

矢部謙太郎, 1999, 「記憶と我の統一——シュッツ初期草稿に関する一考察」『社会学年誌』40: 111-24.

山口節郎, 1981, 「『現象学的』社会学は現象学的か——シュッツの『三つの公準』をめぐる」『社会学評論』32(3): 36-53.

(東京大学大学院人文社会系研究科博士課程 nm7.tk.shogi@gmail.com)

**Alfred Schutz on Social Science and Some Aspects of Life:
Subjective Meaning as the Unity of Meaning and Lived Experience**

TAKAKUSA Ken

The aim of this paper is to elucidate the logic of the division and coherence between science and life in Alfred Schutz. It is often said that he attempts to make common-sense and scientific knowledge consistent in his foundation of interpretive sociology. However, the dichotomy between science and daily life conceals the multiple dimensions in his concept of life. Therefore this paper examines his book *The Phenomenology of the Social World* and manuscripts written in Vienna focusing on the distinction between meaning and lived experience (*Erlebnis*). This conception derives from Bergson. By this distinction Schutz seeks to maintain a critical viewpoint on scientific knowledge and to get a foundation of doxa at the same time.

In *The Phenomenology of the Social World*, Schutz brings the dimensions of meaning and lived experience into the analysis of the social world. First, he scrutinizes the mechanism of self-interpretation. This act constitutes meaning by applying the given knowledge to lived experiences. Schutz claims that understanding as an act of meaning constitution is based on self-interpretation. Then, Schutz deals with the concept of simultaneity of the *durée* on the dimension of lived experience. The ego can see the Other's continuous flow of experience in the simultaneity. While the unity of both dimensions is formed as subjective meaning for the everyday actor, the unity dissolves in the social science, which is "the constitution of objective meaning-contexts out of subjective meaning-contexts" and therefore excludes the dimension of lived experience. However, his recognition of the limit of interpretive sociology does not end up postulating the impossibility of it. Schutz regards the unity of meaning and lived experience in the daily life as "intermediate sphere", which cannot be reached by the purely philosophical knowledge. Here we can find a reliable foundation of sociological reflection.

Key words: Alfred Schutz, science and life, lived experience